

73 愛日文庫蔵「魯西亜漂流之記」は

山片蟠桃の著作か

飯塚修 三

西宮市

一八〇四年（文化元）九月、仙台藩の漂流流民、津太夫ら四人はレザノフに伴われ、十一年間のロシア生活を終えて、世界一周をして、長崎に送り届けられた。

この時、漂流民達は計三種のロシア版世界地図を持ち帰った。その中の四枚からなるメルカトル図法世界図は銀四枚をもってペテルブルグで彼ら自身が購入したものである。

日本洋学史研究Ⅳ（創元社、一九八五年）の「漂流民津太夫らの帰国と地図に伝来」の中で海野一隆先生はその追記に次のように書かれている。

「本論集編集のため拙稿に眼を通された有坂隆道教授によれば、『魯西亜漂流之記』の著者と共に、八軒屋の津太夫らの旅宿に赴いた三名の苗字すなわち佐藤・平

井・三浦は、いずれも山片蟠桃の友人の姓であり、地図の中の文字の筆跡も蟠桃のそれに似ているとのことである、筆者のこの推定はこれにより有力な根拠を得たわけで、蟠桃の作品に新たな一種が加わったことになる。（昭五二・四・二八）」

二〇〇四年、「東西文化交渉研究」（清文社）に海野先生は同論文を再掲載された時、地図の説明文に

「Map of the world in the Orosiya Hyoryu no Ki by Yamagata Bantō (?)」と書かれている。

一八〇五年（文化二）仙台藩の役人は漂流民の身柄引き取りに長崎に行き、帰路大坂に立ち寄ったのは十一月二十九日であった。出立する十二月三日までの数日間、その大坂の旅館に訪ねていった著者（欠名）が、その時の談話や、関係書類をもとにまとめあげたものが「魯西亜漂流之記」である。

山片蟠桃が番頭をしていた升屋は仙台藩と関係が深く、仙台藩が財政危機に陥った時、その建て直しに助力した。そして親しく付き合うことが出来、蟠桃が仙台藩や漂流民を訪ねることが出来た。

愛日文庫は明治維新後、一八七二年の学制発布にあたり升屋当主、山片重明が土地、建物を愛日小学校に提供し、江戸時代より明治初年に至る和漢洋書並びに地図類、全部で五百部三千五百冊を愛日文庫として寄贈したものである。現在は統廃合されて開平小学校内にあるが、愛日教育会が保管、保存をしている。そして、年一度曝書（虫干し）を行っている。

海野先生は二〇〇六年五月四日にお亡くなりになられた。私は生前、山片蟠桃の著作かどうか明らかにすると海野先生にお約束していたのに残念であった。

この度、愛日教育会のご好意により「魯西亜漂流之記」の画像を手に入れることができた。

西宮の辰馬考古資料館に「夢の代」の前身である「宰我の償」という蟠桃の自筆原稿が保存されている。同資料館のご好意によりその画像を得ることができた。さらに大阪府立中之島図書館で「山片蟠桃自筆草稿抄」を得た。

「魯西亜漂流之記」と「宰我の償」と「山片蟠桃自筆草稿抄」の筆跡を比べて「魯西亜漂流之記」が山片蟠

桃の著作かどうか比較検討した。